

技術課、この10年の活動 (1998年～2007年)

技術課長

古 川 和 彦

基礎生物学研究所が30周年を迎える2007年は、私が技術課に赴任して28年目で所内でも古参の一人となった。この10年間で特筆しておくことは、04年4月1日から大学共同利用機関法人として研究所が新たなスタートを切り、これまで慣れ親しんできた「技官」から「技術職員」という身分になったこと、山手地区に山手1号館から5号館が建設され、04年に6研究部門（うち、3研究部門は岡崎統合バイオサイエンスセンター）、4研究室及び2研究施設が明大寺地区からの移転及び新設が完了したことである。法人化によって身分の呼称が変更しただけではなく労働安全衛生などの新たな取り組みや制度が取り入れられた。これを機に職員は所内の労働安全衛生に関して積極的に参画するようになった一方で、明大寺地区と山手地区に職員が配置されることになり、日常の連絡や情報交換に不便を感じることも多くなった。

さらに付け加えると、私が04年4月1日付で、服部宏之前課長（現名誉技官）から現職を引き継いだ。

この10年の技術課活動は、本多八郎元課長及び服部前課長のご尽力並びに毛利秀雄前所長、勝木元也所長をはじめとする教授の先生方の深いご理解とご指導の賜であることは言うまでもない。職員数は91年に35名であったが定員削減で10年前の98年には31名となり、現在は27名となった。それを補う形で、技術支援員（短時間契約職員）の雇用制度が97年から始まり、現在は11名が所属している。今後の技術課を考えると、これまで研究活動を推し進めてこられた教授の世代交代次期を迎え、新任教授の下で新しい研究や技術の導入が期待され、研究者から求められる技術に柔軟に対応することができ、かつ専門性の高い技術者を育成し、さらに、研究所全体の研究活動を支援できる課を作ることが課題である。以下に、この10年間の技術課の活動を記しておく。

1. 技術課組織と技術職員の責務

技術課は研究者組織とは独立した「専門技術を持った技術職員の組織」として設置され、「技術職員は全て技術課に所属して、研究部門や研究施設へ配属され業務を行う」という体制が確立された。職員は配属先で高度な技術を習得するとともに信頼度の高いデータの供給や新しい技術の開発や応用に日々努力すると共に、研究部門等の運営を教員と協力して行い、とくに研究施設では管理運営の企画や利用者への技術提供を行っている。



一方、職員は、以下に述べるような技術課活動を通して情報や技術の共有を図ると共に課として研究所の活動支援ができる大きな力となってきた。その一つが労働安全衛生に係る資格の取得と安全衛生活動への積極的な参画であり、今後も様々な形で課としての支援を行っていきたいと考えている。

2. 技術課の運営と活動

毎月曜日のミーティングで、課長、各担当者からの報告を行い情報交換している。技術課の運営について検討する場として、毎月、課長・班長ミーティング及びそれに係長を加えた技術課運営委員会を行っている。

職員の技術交流としてミーティング後に、日常業務に関する技術についてセミナーを行っている。さらに、1年間の業務をまとめ発表し、議論することを目的に技術報告セミナーを行っている。また、年度末には、業務報告書を課長へ提出している。

3. 生物学技術研究会

88年から始めた「生物学技術研究会」は、回を重ねるごとにレベルが向上してきたと自負している。また、01年からは、生理学研究所技術課の「生理学技術研究会」と合同で開催している。06年からは自然科学研究機構5研究所の技術職員の交流を図るために「自然科学研究機構技術研究会」をスタートさせ、今後も継続していく計画である。

4. 人事

職員の採用は、国家公務員2種の合格者から候補者を選び選考を行ってきた。法人化後は、これに代わるものとして東海北陸地区大学等職員採用試験があるが、02年以降は職員の採用を行っていない。配属先の変
更は、支援業務の幅を広げるとともに、新たな仕事に挑戦するという職員の活性化の見地から今後も実施していきたい。

